

## 宝島社「もっと話そう! Fem&amp;プロジェクト」

サレジオ学院高等学校 高校2年生の男子生徒を対象に

## 女性医学から考える「性教育授業」を実施しました

ファッション雑誌販売部数トップシェア(※)の株式会社宝島社(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:関川誠)は、10～60代の各世代の女性誌10誌、男性誌2誌の計12誌合同で行っているフェムテック・フェムケア啓発プロジェクト「もっと話そう! Fem& (フェムアンド)」の一環として、2026年1月20日(火)、神奈川県横浜市のサレジオ学院高等学校にて、男子生徒を対象とした性教育特別授業を実施しました。

※ 日本ABC協会 雑誌発行人レポート2025年上半期(1～6月)より



宝島社はプロジェクトを通じ、女性の健康問題について「当事者だけの問題」にせず、男性理解が重要と考え、その取り組みの一環として、これからの未来を担う世代への啓発として2023年より男子校での性教育授業を実施しています。

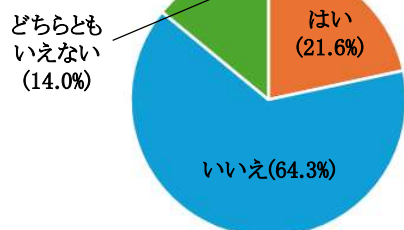
今回の授業は同校の2年生174名に向けて「25歳の男になるために。～女性医学から学ぶ〈知る・想像する・尊重する〉という力～」をテーマに実施。講師には、よしかた産婦人科分院 綱島女性クリニック院長であり、横浜市立大学産婦人科非常勤講師の産婦人科医・粒来拓(つぶらい・たく)先生を迎え、『大人のおしゃれ手帖』編集長の橘真子とともにお話いただきました。

授業では、月経や女性特有の体調不良といった基礎的な医学知識に加え、「痛みや不調は外からは見えにくいこと」「想像することが、相手を尊重する行動につながること」「「正解のない問い」にどう向き合うか」といったテーマについて、粒来先生ご自身の経験も交えながら語っていただきました。

宝島社「もっと話そう! Fem&」プロジェクトでは、今後も性教育を含め、女性の健康課題を社会全体で考える取り組みを続けてまいります。

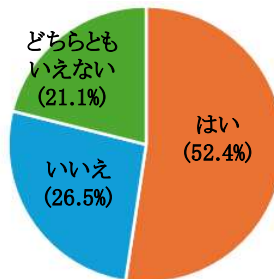
## 【授業前アンケート】

「25歳の自分の姿」を、ある程度具体的にイメージできていますか？



## 【授業後アンケート】

「25歳の自分の姿」は、授業前のイメージから何か変化はありましたか？



「はい」がアップ!

今回の授業が将来像を考えるきっかけとなったようです。



サレジオ学院高等学校が掲げる理念「25歳の男づくり」。一見すると男尊女卑の語弊がある表現ではありますが、シンプルに男子校として「大学合格がゴールではなく社会で責任を果たせる人間形成を」を意図とした気概のある考えと理解しました。

さまざまな見識を深める「総合探求」という授業の一環で、性教育授業のご縁をいただきました。性教育の中でも、今回は「男子高校生にこそ女性医学教育を」をテーマに、月経の意味と月経痛にまつわる知識を共有し、現在そして未来に接する大切なひとになにができるのか。決して「なんでもかんでも男性だから女性を労われ」とか「女性に対してちやほや優しくしろ」と一方的にいうことではなく、「想像力と尊重する力、知識をもとに柔軟な思考と行動する力」を提案してきました。短い時間でしたが、生徒さんたちはみんな真剣なまぎなしで大切な時間を共有できました。

### 粒来拓(つぶらい・たく)先生 プロフィール

よしかた産婦人科分院綱島女性クリニック院長。横浜市立大学産婦人科非常勤講師。日本産科婦人科学会・日本女性医学学会・日本女性心身医学会の各認定医として活動。大学でも非常勤講師として後進の指導にあたりながら、患者ひとりひとりの症状と考え方に寄り添いサポートを行う。

#### ～授業に参加した生徒の感想を一部紹介～

- 生理の痛さのイメージがより鮮明にわかった。また、あの小さな受精卵から一つの大きないのちが育っていくと知ったら生物はすごいなと感じた。
- 生理痛は慣れてくるものなのかどうかがとても気になった。
- 女性を労わることしか考えていなかったが見方が変わりました。
- いつか結婚して、共に生きるということはパートナーを思い、配慮することも大事なのだと改めて思いました。
- 考えることの大切さを知った
- 現代人の月経が昔の10倍近い回数になっていることにとても驚きました。
- まずは自分で調べてみるのが多様性などの理解につながると感じた。
- 先生の実体験が織り交ぜられていたので、より現実味があって、自分に落とし込んで講義を聞くことができました。
- 体のことで困っている女性に対して男性ができることは非常に限られたものだと思っていたのですが、行動によって手助けをすることができると知り、自分にも何かしらできることがありそうだと思います。
- インターネットとかを見ているとフェミニストには悪いイメージしかなかったが、今回初めて正しい秩序あるフェミニズムと知識に触れて、だいぶイメージが変わった。
- これまで「薄っぺらいフェミニズム」を耳にすることが多かったのですが、今回の内容は、これからの女性との関わり方という観点で意義のあるものだったと思いました。

### ◆「もっと話そう！ Fem&」プロジェクトとは

もっと話そう！  
**Fem&**

宝島社の女性誌10誌（※）、男性誌2誌の合計12媒体によるフェムケア・フェムテック啓発プロジェクト。長らくタブー視されてきた女性の健康問題について知る機会や話すきっかけを提供することで、女性がより活躍できる社会に繋げ、ひいては男女に関係なくヒトが生きやすい社会を目指すための活動です。年齢・性別問わず言葉にして話すことを大切にします。

※女性誌10誌のうち、otona ROSYはWEBメディアです

「もっと話そう！ Fem&」プロジェクトでは、性教育授業の取り組みに賛同いただける学校を募集しています。お気軽に宝島社広報課までお問い合わせください。